

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月12日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16162

研究課題名（和文）ポスト過疎時代における資源管理型狩猟に関する民俗知形成のモデル構築

研究課題名（英文）Study on the process of acquiring folk knowledge about hunting relating to wildlife resource management in the extremely depopulated rural communities

研究代表者

蛭原 一平 (EBIHARA, Ippei)

国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・外来研究員

研究者番号：40589371

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、山形県小国町で行われている春グマ猟を事例とし狩猟の実践において猟場に関する民俗知が形成される過程を分析した。さらに、台湾パイワン族猟師が取り組んでいる狩猟担い手育成に関する情報収集や、伝統的狩猟技術の復元調査を実施した。そして、春グマ猟の実践において不可欠となる猟場の地形地理に関する民俗知が狩猟経験を共有することでしか伝承されないものであり、その伝承には「記憶知識」を豊かに持つ猟師の存在が不可欠であることを明らかにした。さらに自文化に対する誇りや土地に対する強いステewardシップがこれら民俗知伝承を促す可能性を有していることも示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

複数年度にわたる狩猟活動への同行調査に基づき猟場の地形地理に関する民俗知の形成過程を実証的に分析することで、民俗知を対象としたエスノ・サイエンス研究や生態人類学的研究、民俗学での生業研究などにおいてこれまで明らかにされてこなかった新たな知識伝承（共有）プロセスを提示した。これは近年、野生動物保護管理理論で盛んに論じられている鳥獣捕獲・管理の担い手育成でもほとんど考慮されてこなかった点である。本研究によって、その継承モデルや課題を精査することで、ポスト過疎時代の農山村において今後より一層強く求められる、野生動物との持続性ある共的關係を再構築していく上での理論的な寄与を図った。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed the process of acquiring folk knowledge (or indigenous knowledge) on the hunting practice, focussing on the traditional bear hunting conducted in spring around the villages in Oguni town, Yamagata prefecture, eastern Japan. Additionally, fieldworks were done both to get informations about a hunting school led by a Paiwan hunter in Taiwan, and to record the skill of making a traditional dead-fall trap used in Oguni town. The results showed that it is impossible to transmit folk knowledge about geographical features of hunting field which is necessary for the hunting practice without sharing hunting experiences with the experienced hunters. And therefore the participations in hunting of them play the indispensable roles on transmitting those knowledge. Furthermore, this study suggested the possibility of their prides in self-culture and the strong stewardship with self-land to promote the transmission of this folk knowledge.

研究分野：地域研究・生態人類学

キーワード：資源管理型狩猟 民俗知 狩猟担い手 猟場選択 春グマ猟 記憶知識

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

継続的な少子高齢化の進行に伴い、日本は本格的な人口減少時代を迎えつつある。とりわけ都市部への人口流出が著しい農山村では過疎化にとどまらず、消滅の危機に直面している、あるいは実際に消滅した集落も現れるなど、ポスト過疎時代へと移行している。いかに「適正」な資源管理を図りながら地域社会を持続、再生させていくかが重要課題の一つとなっている。

このようななか現在、地域の狩猟者も高齢化、減少しており、資源利用として農山村で継承されてきた狩猟活動の縮小衰退が進んでいる。その結果、狩猟集団内で蓄えられていた、山の地形地理や動植物の分布動態など、そこで狩猟を行う上で必要不可欠な周辺環境に関するローカルな知識も急速に失われつつある。民俗知（あるいは在来知）と呼ばれるこれらの知識は資源利用（狩猟）を行う上での実践的知識であるだけでなく、自然に対する地域独自の信仰や利用規範を構成し、自然資源の「適正」な管理とも密接に関わる。実際に、このような民俗知に基づく生業活動や共同体の慣行が自然資源の高い管理能力を有していることが世界各地の少数民族社会を中心に報告されてきた。野生動物を持続的に利用してきた農山村では、狩猟を介し「適正」な資源管理が図られるなかで野生動物との共有的関係が構築されていたのであり、民俗知はそのような狩猟を実現させる重要な要素として位置付けてきたと考えられる。急速にそれら知識が消失しつつあるなか、その伝承のあり方を探ることはポスト過疎時代の農山村における持続的な地域資源管理システムの構築に関わる喫緊の課題と言える。

### 2. 研究の目的

本研究では、野生動物が持続的に利用されてきた社会において継承され、「適正」な資源管理に寄与するローカルな狩猟を「資源管理型狩猟」と位置づけ、それを担う狩猟者たちの民俗知がいかに形成（構築・共有）されるのかについて明らかにする。そして、それらの民俗知の伝承のあり方やそのための課題を探ることで資源管理型狩猟構築の可能性を探ることを目的とした。

### 3. 研究の方法

以上の目的を達成するため、資源管理型狩猟の民俗知形成過程に関する事例研究、台湾パイワン族の狩猟担い手育成活動に関する情報収集、伝統的狩猟技術の復元に基づく民俗知伝承に関する事例研究を実施した。

#### 資源管理型狩猟の民俗知形成過程に関する事例研究

地域社会内において高い資源的価値を有しており、狩猟活動が歴史的に継続されてきた地域を対象とし、狩猟活動への同行と聞きとりに基づき狩猟の民俗知形成に関する民俗誌的データの収集を行った。ただし、狩猟に関わる知識というのは多岐にわたっており、かつ総体的でもある。そのため、狩猟成果に大きく影響を及ぼすと考えられた猟場選択に関する知識を中心に記述分析することとした。研究開始当初、沖縄県西表島のイノシシ猟と、山形県小国町の春季クマ捕獲（春グマ猟）を現地調査の対象地としていたが、前者に関しては既にかんりのデータ蓄積を得ていたため後者に関するデータの収集を重点的に行うよう変更した。また、積雪状況や落葉広葉樹の開葉状況など、春グマ猟に影響を及ぼす猟場の自然環境的条件は年によって異なるため、その知識構築について論じる上で複数年度にわたる事例の蓄積が不可欠である。そこで本現地調査は研究期間内、毎年継続して実施することとした。

#### 台湾パイワン族の狩猟担い手育成活動に関する情報収集

台湾のパイワン族猟師アーロンロン・サキヌ氏（森林警察）は、2006年より「獵人学校」を主宰し、狩猟文化の発信や集落内外の若者たちへ狩猟規範や知識を伝えるなどの活動を通し、狩猟の担い手育成に取り組んでいる。そこで、サキヌ氏及び関係者への聞きとりを主とする現地調査を実施し、その取り組みについて情報収集を進める。また、同氏を研究協力者として国内開催のワークショップ（WS）に招き、事例紹介と相互議論を図ることで民俗知伝承に関する課題について検討することとした。

#### 伝統的狩猟技術の復元に基づく民俗知伝承に関する事例研究

東日本豪雪山間地に位置する伝統的狩猟集落（いわゆるマタギ集落）のなかには、春グマ猟だけでなくオソやヒラなどと呼ばれる吊り天井式重力罠をも用いてクマなどの捕獲を行っていた集落がある。山中でのこの罠を用いた狩猟には、クマの行動生態や猟場の地形、あるいは素材となる植物についてなど民俗知が不可欠であり、資源管理型狩猟の構築において注目される。しかし、現在、法律によって使用が禁止されているため、その伝承者が急速に減少し、知識・技術が失われることが危惧されていた。実際に、本研究を遂行していくなかで、小国町においても経験者がごくわずかしかいないことが判明した。そこで、急遽、経験者の指導の下、罠を復元作製してもらい、映像記録を行うことで製作技術等を後世へ伝えるための記録資料を作成することとした。その際、地元の狩猟者で、これまで作った経験のない人たちにも作業へ加わってもらうことで民俗知の世代伝承を促すとともに、それら実際の復元作業の結果に基づき、罠猟をめぐる知識・技術の伝承に関する課題についても抽出することとした。

#### 4. 研究成果

本研究では上述の内容に沿って現地調査、WS開催等を進めた。主な現地調査として、小国町での春グマ猟に関しては、2015年～2018年に毎年、捕獲許可期間である4月初旬～5月初旬までの間に約10日間それぞれ実施した。また、西表島のイノシシ猟に関しても2016年12月に現地調査を行い、民俗知形成過程について事例のさらなる蓄積を図った。吊り天井式重力罠（オオモノビラ）の復元作製調査は2018年10月に小国町小玉川地区内で実施し、材料確保から罠の製作に至る一連の過程を映像記録した。そして、その技術を後世へ伝えることを目的の一つとして、一般向けブックレット『小国マタギの今・昔』を編集作成した。

この他、2015年9月に台湾台東県で獵人学校の活動について情報収集を行った。そして、2019年1月にサキヌ氏を招聘し、「狩猟という『文化』を伝え、継ぐ」と題したWSを小国町内で開催した。本WSにはコメンテーターとして田口洋美・東北芸術工科大学教授にも加わってもらい、本町の狩猟者を中心として約30名の、一般の方々の参加を得た。

これらの結果を踏まえ、以下の2点について考察を行い、学術図書等で成果を発信した。

##### 狩猟実践における民俗知形成過程からみた伝承の課題

西表島のイノシシ猟は跳ね上げ式脚括り罠を用いる罠猟が主流である。罠猟の場合、予め捕獲対象獣の行動を予測して罠をかけるポイントを選択する必要がある。研究代表者はこれまで西表島の罠猟師を対象とし、実践を繰り返すなかでイノシシの行動や生態に関しての知識を個人のなかで深めていく過程について論じた。一方、巻き狩りを主体とした小国町の春グマ猟の場合、ほぼ全ての捕獲がクマを目視で確認しながら行われる。そのため、獵果を左右するのは、捕獲対象獣であるクマの行動を予め予測するための知識よりもむしろ、発見したクマへ適切かつ安全に接近するための地形地理に関する知識である。例えば発見したのが、その日出獵したクラ（巻き狩りを行う獵場の斜面）と離れた場所であっても、到達可能であればそちらへ移動したり、あるいは翌日にまたそちらの方へ出獵するといった対応がなされたりするからである。無論、発見率をより高めるため、冬眠明けのクマの移動パターンやブナ等高木の開葉状況などを総合的に勘案し、その日出獵する場所が、とくに経験豊かな獵師たちの意見を基に協議される。しかし、罠猟とは違い、それが獵果に直接影響するわけではない。

クマのいる場所やその状況は絶えず異なり、「どこどこにクマがいる場合、こういうふうには捕獲する」といったように一般化して語ることは不可能に近い。これに対し、春グマ猟の現場では、狩猟経験の豊かな獵師が「記憶知識」を基に捕獲者達へ指示を出し、それを受けた捕獲者達はその経験を通し、その場に関する記憶知識を構築するというプロセスが確認された。オオモノビラの復元調査においても、その作製「技術」に関しては映像等で記録可能であり、それが「技術」伝承に効果的であることが確認できた。しかし、それがかつて設置していた実際の場所は、地名や地図のみで正確に伝えることは困難である。同様に、春グマ猟の実践において重要な地形地理に関する知識も基本的に表出・伝達が不可能であり、ともに行動し経験を共有しなければ「伝承」されないものである。それゆえ、このような民俗知を伝承するためには記憶知識を豊かに蓄えた獵師の存在が不可欠であり、そのような人たちに狩猟現場へ参加してもらい円滑に経験の共有が図られるような狩猟のあり方を探ることが重要な課題であると考察された。

ただし、ポスト過疎時代においては地域内の狩猟者が皆無に等しく、このような垂直方向の民俗知伝承が非現実的な場合も十分想定される。そのため、近傍地域に暮らす狩猟者との共獵といった様々な「知」の交流を通じた水平方向の民俗知形成に関しても今後検証していく必要がある。

##### アイデンティティ醸成による民俗知伝承促進の可能性

サキヌ氏が獵人学校で伝えようとしているのは、具体的かつ効率的な捕獲技術や動植物の整理生態に関する一般化された知識ではなく、むしろ、親や先人から教えられてきた自然観であり、狩猟や肉の分配に係る社会的規範である。春グマ猟でも同様に、狩猟に関する様々な禁忌や山の神に対する信仰、クマの魂を供養する祈りなどが実践されている。そして、このことが一般のハンターとの違いとして彼ら自身も自覚しているように、アイデンティティの醸成につながっている。同時に、「自分達の山」、「あのクマ」といったように獵場や狩猟対象獣の所有意識も強化させ、それら管理へのスチュワードシップ（受託責任）を生じさせていると言える。このような自文化に対する誇りや土地に対する強いスチュワードシップは、文化としての狩猟の民俗知を伝えること、あるいは学ぶことの必要性・重要性を伝承者自身に覚醒させ、その伝承を促進させる可能性を有していることが示唆された。

ただし、それが同時に、民俗知が本質的に持つ可塑性を失わせ、ステレオタイプ化した語りによって陥ってしまう危険性も内包しており、それをいかに回避させるかについては今後の検討課題である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

1. 蛭原一平、「西表島における人とイノシシとの関わり 西部の猪垣と狩猟を中心として」第9回シシ垣サミット in 西表、沖縄県八重山郡竹富町、祖納公民館、2016年12月10日。(招待講演)

〔図書〕(計3件)

1. 蛭原一平、齋藤暖生、生方史数、2019、「森とともに生きる人々の文化と民俗知」、『森林と文化 森とともに生きる民俗知のゆくえ』(蛭原一平、齋藤暖生、生方史数編、共立出版) 1 - 17.
2. 蛭原一平、2019、「山を知る 森とともに生きるマタギたちの民俗知」、『森林と文化 森とともに生きる民俗知のゆくえ』(蛭原一平、齋藤暖生、生方史数編、共立出版) 172 - 203.
3. 齋藤暖生、蛭原一平、生方史数、2019、「民俗知のゆくえと現代社会」、『森林と文化 森とともに生きる民俗知のゆくえ』(蛭原一平、齋藤暖生、生方史数編、共立出版) 261 - 283.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

1. ブックレット『小国マタギの今・昔』(編集発行 蛭原一平、2019年3月12日発行、総32頁)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

蛭原 一平 (EBIHARA, Ippei)

国立民族学博物館・学術研究資源開発センター・外来研究員

研究者番号：40589371

### (2) 研究協力者

アーロンロン・サキヌ (YALONGLONG, Sakinu)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。